

スペイン巡礼記（2012年春） 目次

<2019年1月掲載版>

(1) プロローグ

(2) 巡礼日記

4月24日(火)―25日(水) 冒険への出発

4月26日(水) 友との遭遇

4月27日(木) 別荘への招待

4月28日(土) 土砂降り

4月29日(日) 旅は道ずれ世は情け

4月30日(月) 皮袋 (Bota)

5月 1日(火) 巡礼宿の愛

<2019年2月掲載版>

5月 2日(水) もてなし

5月 3日(木) ポンチョの効用

5月 4日(金) ブルゴスの夜

5月 6日(日) いさかい

5月 7日(月) 大脱走のマーチ

5月 8日(火) 心の温かさ

5月 9日(水) フランスの道の魅力

5月10日(木) 楽しい夕餼

5月11日(金) パエジャ

5月12日(土) 最後の晚餐

5月13日(日) 休息日

5月14日(月) 山越え

5月15日(火) フランス人の町

<2019年3月完結版>

5月16日(水) ガリシアの屋根

5月17日(木) マラソン

5月18日(金) 湖底に沈んだ町

5月19日(土) 便利なポンチョ

5月20日(日) プルポの味

5月21日(月) 旅は道ずれ世は情け

5月22日(火) 星の降るサンティアゴ

5月23日(水) 鐘の音

(3) 便利帳

(A) 持ち物で特に役立った物

(B) 注意事項

(4) エピローグ

スペイン巡礼記

田中 実

5月16日(水) ガリシアの屋根 Villafranca-Ocebreiro 28km 7時間半 快晴

今日は海拔 504m の Villafranca から 1300m のガリシア州 Ocebreiro まで一気に登るきつい道である。6時20分に出発したがまだ辺りは真っ暗である。町を抜けて Río Valcarce 沿いの車道脇の舗装された巡礼道を歩いて行くがせせらぎを聞きながらの旅は心地よい。Vega de Valcarce にある国道沿いの近代的なドライブインで café con leche と Churros を食べる。最近ではチュロスも日本でも見かけるようになったが昔はなかった。やがて登りがきつくなり足の速い2人組みのドイツ女性に抜かされる。彼女らは背も高く男勝りの歩き方をする。Las Herrerías の休憩場で美味しい水を飲みいよいよこれ以降はきつい登りとなる。マラソンの様に2吐2吸の呼吸方で舗装された急こう配の車道を登ってゆく。上からは Ocebreiro へ巡礼者を送った折り返しのタクシーが猛スピードで下ってくる。足の悪い人、体調の悪い人はこの坂は本当にきついだろう。途中馬が車道を歩くと見えて糞が一杯落ちている。頂上の Ocebreiro まで 5.8km の La Faba にやっとたどり着く。先に抜かされた2人組み女性が休んでいるので追い越してゆく。頂上まではたっぴり2時間はかかりそうである。その村からは岩だらけの険しい登山道をはい登り見晴の良い登山道に出てゆくがこの風景は日本のそれとそっくりである。オレンジを食べて山々の景色を見ながら一休みする。小さな村が見えてきたのでてっきり頂上だと思ったがそこからまだ登りが続く。漸く Ocebreiro の村にたどり着くが Albergue は村の外れにあるので見つけるのに苦労する。山の頂上のこの村には巡礼客、観光客相手のレストラン、ホステルなどがあるだけである。Albergue public de la Xunta は今までで一番きれいな施設である。ガリシア州では J の代わりに X を使うようでカステジャーノでは Junta となり自治政府の意味。

Albergue も地方により呼び名が Municipal から Parroquial、Xunta と変わってゆくのは興味深い。スペインではカタルーニャやバスクが文化、言葉の違いから独立運動を目指しているが中央集権国家の日本人から見ると非常に興味深い。

昼は例によって巡礼定食を食べたがそのレストランで丁度食事をしていたアルゼンチン人の青年と仲良くなり、私もブエノスアイレスに居たことから話がもりあがった。彼はスペインに移住して今は旅行者向けのお土産品の卸を生り合いとしてかなり羽振りが良さそうで、別れ際に Bota をプレゼントしてくれた。Ocebreir は小さな村のため見るところも無いので初めてミサに参加した。牧師の言葉は難しく半分しか分からないがキリスト教徒でもない私が穏やかな気持ちになるのはなぜだろうか。



ビジャフランカ城



石の道標

5月17日(木) マラソン Ocebreiro-Triacastela-Sarria 39km 11時間 快晴
Triacastelaまではほぼ下りで距離も21kmと短いのでその先に進むかどうかは様子を見て決めるつもりで7時に出発する。Alto de San Roque, Alto de Poloまでは登りが多い。ここを過ぎると高原状の巡礼道を国道沿いに歩いて行くが国道を歩いている親子もいたのでその方が楽かもしれないと思った。この辺の村では零細農家が多く数頭の牛を飼っているだけで昔の日本とよく似ている。宇治の田舎にある母の実家でも1-2頭の牛を飼い小牛が生まれるとそれを売って家計の足しにしていた。Fonfriaのあたりでは有名なクレープおばさんが出没してクレープを勧められたが金を払ってまで欲しくないので丁重にお断りした。下りにかかるとまたもや健脚の同じ女性二人に抜かされる。前に歩いている日本人らしき女性を抜かすが韓国人であった。このあたりは栗の産地であり中には樹齢800年、幹回り8.5mの栗の大木もある。12時に漸くTriacastelaの村の入り口にあるAlbergue de la Xuntaに到着するが受付は1時からということで19km先のSarríaまで行く決心をする。

週末は雨模様との天気予報のため天気の良い内にできるだけ距離をかせいでおきたい。Albergueの前にあるレストランで巡礼定食を食べた後、やおら出発する。Samosを通るルートとSan Xilを通るルートがあるが距離の短い後者をとる。Alto de Riocaboまでは絶えず登りでかなりきつい道が続く。途中自転車の4人組みに抜かされる。午後2時を過ぎているということで巡礼者には全く会わない。しかも鬱蒼とした山道で追いはぎでも出ればやばいなと思い心細くなる。車道に出たところで休憩しているデンマーク人女性2人組に出会って救われた気分がする。Triacastelaから約10kmの間、レストランもバーも全くないため彼女たちは昼食を取っていないということで私が持っていたチョコレートをおげると大層喜んでくれた。彼女たちより先に出発したが、レストランの標識に惑わされて道を間違える。このあたりは牛が多いため小道も泥と糞がまじってどろどろ状態である。もと来た道をもどって彼女たちに合流して一緒に歩く。暫くすると健脚のイタリア人女性が追い抜いてゆく。既に4時になりやっと村でBarを見つけてcañaを飲む。遅れて来た女性2人連れと同席して雑談するが彼女達も大層心細かったらしい。結局19kmの間、7人に出ただけである。普通巡礼者は午前中に歩き2-3時には目的地に着く旅程をたてるので

午後4時になれば巡礼者は非常に少ない。さらにこのルートは Samos 経由で行く巡礼者が多いのでなおさらである。6時近くになりやっと Sarría の町に到着する。かなり遅いので Albergue に泊まることを諦めてホテル又はホステルを探して街道沿いの Oca Hotel に泊まる。料金は朝食付きで 30 ユーロと安い。小奇麗な部屋であり久しぶりに浴槽にゆっくり浸かってリラックス、夜更に悩まされずぐっすり眠れる。明日の食料を仕入れるため町に出たが木曜日だというのにスーパーは全て閉まっているので腑に落ちず町を歩いている人に尋ねると今日は祭日だという。



憩のひと時



栗の古木

5月18日（金）湖底に沈んだ町

Sarría-Portmarín 22km 5時間半 晴れ後曇り 夜一時雨

昨夜はかなり疲れているので良く眠れると思ったが思いの外静かすぎて寝られない。今日は 22km と距離も短いので 8 時少し前に出発する。小雨が降ってきたので途中でリュックに雨除けカバーを付けたら更にポチョも着て出発する。Albergue やレストランのある巡礼道を通って郊外に出てゆく。少し歩くと雨も止んだのでポンチョを脱ぐ。Sarría から Santiago まで 115km であるが、Santiago まで 100km 以上を通して歩くと巡礼証明書をくれることになっているので、Sarría から出発する人も非常に多くなる。更に団体に観光気分ですぐ小さなリュックをかついで楽しそうにがやがや騒々しく歩くグループも多くなって巡礼道は多くの巡礼者を見かけるようになる。彼らは目的地では大きなホテルに泊まるグループが多い。どの様な歩き方をしても自由とはいうものの大きなリュックをかついで長距離を苦しみながら歩くのが真の巡礼者であるという思いは強い。Portmarín までは森の中の巡礼道が多くて心地良い。途中 100km 地点に記念碑があり漸く 100km まで来たと感慨もひとしおである。記念撮影。しかし余り興味を示さない巡礼者も多い。湖の橋を渡り階段を登ると Portmarín の町に到着する。この町は 1986 年にダムを作るために湖底に沈む村を湖を望む丘の上に移したものであり、壁は白色、屋根はねずみ色に統一されているがやはり屋根は赤レンガ色の方が色彩的に美しいと思う。町はずれにある新しい Albergue de la Xunta に投宿する。この Albergue は新しくシャワー、トイレも男女別であり、更にベッドカバーもくれるので非常に快適。近くの公衆電話から Faustino の携帯に電話する。今 Ocebreiro の頂上にいるが雲で何も見えないという。皆元気に歩いているようで安心す

る。夜町を散策中に例のデンマークの女性2人連れがバーのテラスでワインを飲んでいるのを見つけて同伴する。彼女らは軒がいやで何時もホステルに泊まるとのことだが料金は2人で35ユーロで安い。彼女達も昨日無理して39km歩いたお蔭で旅程も楽になったと喜んでいて。暫く雑談していると雨が降り出し寒くなったのでお開きとする。



巡礼道



100kmの道標

5月19日(土) 便利なポンチョ Portmarin-Palas de Rei 25km 6時間半 晴れ一時雨
PortmarinからSantiagoまで93kmであるのでSantiagoに22日に到着するには毎日平均23kmを歩けば良いわけで先日39kmを歩いたお蔭でかなり余裕ができた。デンマーク人の女性もSarriaまで39kmを歩いたのは正解だと言っていた。今日の巡礼道は殆ど舗装された道で歩きやすい。景色もどこか日本の里山の景色に似ている。農家の庭先には校倉作りの小屋があり何に使うのかと聞いたところ穀物をそこに保存して乾燥させるとのことであった。突然空模様がおかしくなってきたのでリュックの一番上に置いていたポンチョをあわてて着る。突然の雨にはポンチョは非常に便利である。30分たつとまた晴天となった。この辺りは500-750mの高原のため山岳地帯の気候である。途中のレストランの庭に2-3mのアリのオブジェが飾ってあり大変珍しく思い記念撮影する。以前何度も会っている韓国人のおばさん3人組みと会ってエールを交わす。もくもくと歩く姿はまぶしい。PalasからはSantiagoまではわずか65kmである。既にゴールも見えてきたが、毎日ひたすら歩くことが‘楽しみであり’‘苦痛であり’‘目標であり’‘義務であり’今やめてすごすご日本に帰る訳にはゆかない。良くここまでたどり着いたと思う。教会の脇の巡礼道を抜けて階段を下りると古いAlbetgue de la Xuntaに到着する。2時にはまた雨が降り出して夜まで雨が降り続いた。Paellaが食べたくレストランに入るが巡礼者で既に一杯でpaellaは既に売り切れとのことで残念であった。毎日パンを食べていると、やはり日本人は米に哀愁を感じるものである。途中であったカナリーから来ているという5人組の男の内の一人は足の裏に大きい水ぶくれを作っているの、仲間がそこに蝟燭をたらし治療していた。初めて見るがこれは効果あるのだろうか？彼等は夜雨のため外出することもできないためカーを貸した。私は向かいにあるバーに入りcañaを飲みながらサッカーの中継を見て時間をつぶした。



ポルトマリンの朝



巡礼道

5月20日（日）ブルボの味 Palas-Melide-Aruzúa 28km 7時間 晴れ

今日は Melide 泊まりでも良いという気持ちなので余裕がある。スペイン仲間から推奨されたタコ料理を Pulperia Ezequiel で食べるのが楽しみである。Lugo 州から Coruña 州に入ってゆく。Palas からは森の小道や、石畳の道等があり趣がある。途中で以前巡礼道で見たことのあるオーストラリアのアデレード出身スコットランド在住の女性としばらく一緒に歩くが非常に足が速いので別れることにする。私のスピードは中の上であろう。概して一人旅の人は体力に自信がり歩くスピードも速い人が多い。Melide まではわずか 15km であり 11 時には Melide に到着する。巡礼道に面して例のレストランがありそこに入る。まだ時間も早くひょっとすると待たされるかもしれないと腹をくくったが、既に 2-3 人の客がタコを美味しそうに頬張っている。元来タコを多く食べるのはスペイン人、日本人位でこの辺も食性が似ている。この店はタコだけを料理しているのでタコ (pulpo) を注文する。どの様に料理するのか見てみると多くの大きなタコをそのまま大鍋でぐつぐつ煮ている。それを取り出しハサミで一口大にタコの足を切ったうえで丸い木のお盆の上に無造作に置いてそのタコにオリーブオイルと赤い色の香料 (pimienta picante-辛いピーマンの粉) を振りかけて出来上がりである。ワインを注文すると 1 本持って来てくれる。タコはむちむち柔らかくオリーブと香料が程よく効いて酢だこより美味しいのではないかと思った。日本の刺身なら数キレだけだが恐らく 200-300g はあると思われ爪楊枝でつついて食べるものだが余りの美味しさにワインを一本平らげてしまった。店にオランダ人の団体が入ってきたのでタコを振る舞うと喜んで食べていた。これで 10 ユーロとは全く安い。ワインを飲みすぎて千鳥足で出発する。賑やかな Melide の町を通り抜けてまた石畳の小道を 14km を歩いて Rio Iso を抜けるといよいよ目的地 Aruzúa である。一本道をどんどん歩いて行くが Albergue de la Xunta がなかなか見つからないので痺れを切らして民営の Albergue Los Caminantes に宿泊することにする。ここは 8 ユーロだが新しく特にトイレ・シャワーが個室になっており極めて心地が良い。また大部屋に 30 余りのベッドがあるが巡礼者はわずか 10 名位なのでスペース的にも余裕がある。天気は良いものの非常に寒いので日向ぼっこをしている巡礼者は震えている。食事の前に近くのバーで一杯ひっかけようと町を歩いていると例のデンマーク女性 2 人をバーのテラスで見つけたのでワイ

ンを飲みながら談笑する。お開きの後、人の良い宿のオーナーに教えてもらった焼肉屋 (asado) に行くと韓国男性2人が焼肉をつついている。一人が英語を話すので暫く彼らと談笑する。毎日ひたすら歩くため朝はジュース、ヨーグルト、パンやクッキー、道中ではオレンジ、チョコレート、クッキー、ピーナッツ、昼は巡礼定食、夜は軽食で全く良く食べるが直ぐ腹が減る。これだけの運動を毎日しているのだから痩せていると思うが Santiago で体重を測ろう。またリュックの重さも知りたい。



リオセコ川



メリデのタコ料理

5月21日(月) 旅は道ずれ世は情け Arzúa-Pedrouzo 20km 5時間 晴れ後曇り一時雨
今日は距離が短いので朝8時少し前に出発する。昨日は日曜日で食料が手に入らなかった
ので隣のバーで café con leche と非常に大きなクロワッサンを食べる。これが又旨い。
旅程に余裕があるので意識的にゆっくり歩いたが返って疲れを感じる。各人の歩くペース
がありユックリすぎても良くないようである。街道筋にはユーカリの大木が生い茂っている
ので歩くのに心地良い。途中で荷箱付きのリヤカーを引いているスペイン在住でアイル
ランド出身の男性と並歩したがこれがまた早く歩く。巡礼者も色々な人がいるものだ。
Pedrouzo まで3.5kmのところまで昨日同じ Albergue に宿泊していたちょっと生意気そうな
スペイン女性が歩けなくなり半泣き状態である。クリームを塗ってまた歩くというので彼
女のリュックを担いでやることにした。リュックは5kg と軽く胸の前に抱えて私のリュッ
クと合わせて15-16kg となったが今までの鍛練の効果で足腰も強くなっているの
で別にっらいとも思わない。彼女は木製の巡礼杖を使っているが例のカナリーから来た巡礼者の一
人がスチール製スティックを貸してやる。やはり両手でノルディック風に歩いたほうが良
いようである。旅は道ずれ世は情けということで、東洋人がスペイン人を助けているので
随分目立ったようで賞賛の声も聞こえる。私は Arzúa で紹介してもらった Albergue
Otero に宿泊するので町の入り口で彼女と別れた。シャワーの後巡礼定食を食べに行くと
丁度カナリー組と彼女が合流しているので、大丈夫かと聞くと医者に行って手当てをして
もらったという。私に大層感謝してくれて熱いキスをしてくれる。Albergue は新しくそこ
そこ綺麗だがシャワーの水が下水に旨く流れないため絶えず受付の女性がモックで掃除を
している。私営 Albergue なのでもっと空いていると思ったが団体の客のリュックが到着
しており夜にはほぼ満室になった。同じ Albergue に宿泊する一人の日本人女性と話した

が、彼女は既に数回巡礼道を歩いていて写真が好きで今回は Santiago から逆方向に歩いて主に巡礼者を撮影しているという。いよいよ明日は Santiago に到着すると思うと非常に嬉しい。



野に咲く花



円盤石

5月22日(火) 星の降るサンティアゴ

Pedrouzo-Santiago de Compostela 20km 4時間半 曇り後晴れ

いよいよ Santiago ということで自然に足が速くなる。2時間歩き Bar で Café con leche を飲む。その Bar には8人の韓国人がいたが何処でも韓国人を見かける。経済だけでなく巡礼者もすごいパワーを感じる。かなりの速さで歩いたので左足の親指が痛くなりスピードダウンする。Santiago の飛行場を通りすぎるといよいよ Santiago である。Monte de Goza まではだらだらとした登りでかなりこたえる。昔巡礼者がここから Santiago を見て涙を流したという丘に到着する。涙を流している巡礼者はなく皆嬉しそうである。小休憩の後いよいよ Santiago の町に入ってゆく。前には2人のドイツ女性が良いリズムで歩いて行く。概してドイツ人巡礼者は足が早いようである。途中で挨拶したが英語が喋れないと見えてそっけない。大きな交差点を渡りいよいよ待望のセントロである。Santiago は観光と学生の町で人口は10万人であるが、観光客が多いため活気がある。途中で Santiago 在住のおじさんに挨拶すると、‘どこから歩いて来たのだ。私は牧師である。12時にミサが始まるので今からでも間に合う’ と言って祝福してくれた。賑やかなセントロに着くが道が込み入っていて何度も Catedral の場所を聞く。遂に 11時30分に Plaza do Obradoiro に到着して Catedral の荘厳な尖塔を仰ぎ見る。良くここまで歩けたと感慨一塩だが不思議と涙はでない。見知った巡礼者は周りにいないので Catedral の中に入ってミサに参加する。厳かなミサの後、巡礼者の出発地及び国籍、人数を発表するが私はまだ巡礼証明書をもっていないのでその数に入っていない。日本人は3名いたようだが、韓国人は10名で数で圧倒されている。その後、天井に吊り下げた香炉 (Botafumeiro) を牧師さんがブランコさながら大きく揺らせるがこれはすごい迫力である。香炉からは何とも言いえない香りがするような気がした。ミサも無事終了して出口に向かって歩く途中例の西山さんが私を見つけてくれてびっくりすると同時に互いの健闘をたたえあう。また例のデンマーク人の2人組みの女性もミサに参加していたようでお互いを称えて写真に収まる。もっと泣いている巡礼者がいると思ったが殆どの人は Santiago にたどり着いた喜びのため

ニコニコしている。西山さんと連れれの女性小林さん共々夕食を共にすることでその場を後にして、顔見知りのアイルランド人について巡礼証明書をお願いに行く。教会の裏側にありちょっと見つけにくい。受付の男性が簡単な質問のあと名前と日付を記入した証明書をくれる。これは巡礼者の勲章であり大事に額に入れて部屋に飾っているがラテン語で書いてあるので意味は分からない。教会の近くにある立派な構えのレストランに入って caña と赤ワインと Paella を食べる。Santiago に到着したという安堵感、満足感、充実した気持ちで非常に幸せである。今背負っているリュックの重さを測るためリュック込とリュック無の重さを薬屋 (farmacia) の秤で測ったが 13.2kg であった。貧乏性のため余り捨てたものはなく、一方貰った Bota, Poncho, 厚手の靴下が増えているので事他重い。もしペットボトルに水を 1 リットル入れていたら 14kg を超えるところであった。10kg 前後が理想的といわれているのでかなりウエイトオーバーである。予約してあったホテは Centro から歩いて 15 分位のところであるのでちょっと不便だった。しかし道筋には洒落た店も多くあり浮き浮きした気持ちでホテルに向かう。ホテルはアパートをホテルに使っているようなところであるので 35 ユーロと非常に安い割に小奇麗で居心地が良い。ゆっくり湯船につかりうとうとと至福の時間を過ごす。その後は最後の洗濯である。暫く昼寝をして 6 時にホテルを出てセントロに向かう。今回荷物を減らすためにトレッキングシューズとスリッパしか持ってこなかったのもので町で靴を買う。またトレッキングシューズや土産物を入れるための軽いバッグも買う。リュックはパンパンに一杯物が入っているのでバッグを買ったのは大正解であった。西山さん、小林さんと Catedral の前で落ち合ってからまだ夕食にはちょっと早いので Bar で caña を飲む。テラスは観光客で一杯だが皆楽しそうである。巡礼者は長距離を歩いて来ただけに皆満足感にひたっている。西山さんはまだ足を引きずっているが Logroño や Leon や Astorga でかなり長く逗留していたらいい。小林さんはフランスの San Jean から歩いたらしく立派である。しかし Albergue ではやはり軒には困ったと面白い話をしていた。セントロの小道の両側に店を構えたレストランは 30cm はありそうな伊勢海老やカニが入った魚介類の水槽を表側に置いて客の呼び込みをしている。魚介類の店に入って赤ワインで乾杯して魚介類の盛り合わせをつつくが極めて美味である。という訳で楽しい一夜を過ごす。夜も更け月明かりに照らされて神々しく輝く Catedral が目の前にあった。



サンチアゴ大聖堂



香炉のブランコ

5月23日(水) 鐘の音 Santiago 快晴

今日は Santiago 市内観光と2回目のミサに参加するだけなので朝ゆっくり起きようとしたがやはり1ヶ月の習慣が身について6時に目覚めてしまう。また身に悩まされることもないのに夜何度も目が覚める。今日は再度薬局で体重を測ったが76kgであり日本から出発時の78kgから2kg体重が減っただけである。人によっては4-5kg減る人もいるとのことである。かなりの運動を毎日こなしたが、それに比例して良く食べたので2kg減ということになったのだろう。しかし体調は非常に良いので嬉しい。ミサは12時から始まるのでそれに間に合うように今日は早くから着席する。讃美歌を聞いていると長かった Camino の風景が脳裏によみがえりジーンとする。今日は残念ながら香炉のショーはなかった。昨日は夕方にもミサがあったということで私は昨日の巡礼者数字にカウントされているらしい。外にでると昨日と同じく今着いたばかりの巡礼者が Catedral をバックに記念撮影している。中には一人カテドラル前の広場に座り込んで瞑想している巡礼者もいる。彼等にとって一番心休まる至福のひと時であろう。今日は気温31度で初夏の暑さである。町は巡礼者ばかりでなく観光客も多くどこも非常ににぎわっている。絵になる2人づれがいたので写真を撮ると冗談でモデル代を払えと言われた。オジーサンと孫でフランスから歩いてきたという。オジーサンの年は78歳だというが、それにしてもオジーサンの方が重いリュックを担いでいるのには驚いた。オジーサン曰くお前の様な背の高い日本人は初めてなので写真を撮らせてくれというので先ほどのお返しにモデルになった。その後新鮮な野菜、果物、肉、魚を売っている市場に入り、肉屋で見つけた Jamon Jabugo を50g 8ユーロで買う。やはり日本で松阪牛なみの価格である。更にサクランボも買う。町にはかなりの物乞いがいるがやはり経済状況が悪いのだろうか。例えば経済状況の良いチリでは最近では全く物乞いを見かけないようになった。夕方観光客で一杯の Bar に入ってカウンターでタパスをさかんに赤ワインを飲む。横の椅子に夫婦が座っていたので品のある奥さんに声をかけるとベネズエラか来たのだという。パンプローナから700km歩いて来たというで大層驚いていた。私もかつてチリに住んでいたという自分も大使館に勤めている何某という日本人と友達だと大層話がもりあがった。その後公衆電話から Pepe に電話すると25日には Santiago に到着するという。明日日本に帰るというとメールを送るから返事を必ず欲しいと名残惜しがっていた。彼等とは今も時々メールで近況報告をしているが、かけがえのない友になった。携帯は便利なもので日本で使っていたそれで日本へ即座に電話できる、今回妻には何時もメールを送っていたが今日は電話で25日に予定通り日本に着くという大層安心したようである。孫の和佳を毎日保育園に送って行くのが大変だとこぼしていた。1ヶ月気ままに遊ばせてくれてありがとう。

夕方7時半に Plaza Obradoiro の広場に座り込んで1ヶ月のことを思い出して感傷にふけていると Catedral の鐘が鳴り出す。青空に浪々と響く鐘の音は心に沁み入り、苦勞の末 Santiago に到着した巡礼者の私を祝福してくれているようで何とも心地良い。知らず知らず涙が溢れてきて止まらない。この感慨は一体何であろうか？巡礼の道が世界中から巡礼者を引き付ける理由が分かったような気がする。いよいよ明日は帰国である。一つの事を無事やり遂げたという充実感、安堵感、幸福感を胸に安らかな眠りにつく。



市場の肉屋



サンチアゴ市内

(3) 便利帳

(A) 持ち物で特に役立つ物

— 耳栓

Albergue に宿泊する時は必ず騒ぎになやまされる。音は完全には遮断されないがかなり音が小さくなる。

— アイ・ブラインド

部屋は完全には真っ暗にならないので明かりがあると眠れない人に便利である。

— ヘッドランプ

暗い内に出発するとき道標を見失わないように。更に朝早く起床する時は出発準備に便利である。

— 安全ピン

洗濯物を干す。更にそれが一晩で乾かない場合はリュックに吊るすのに便利。

— メガネの吊り紐

メガネを必要とする人は両手がスティックなどで塞がっているので汗を拭く時、更に夜寝るときその紐でベッドの上のスプリングの網などにメガネを吊るして置くと起きた時すぐ取れて便利。ヘッドランプも同様に吊るしておいた。

— コップ

歯を磨く時、巡礼道に多くある給水所等で水を飲む時に便利。

(B) 注意事項

— リュック Deuter 45+10L

初めて背負う人は完全に背中にフィットするよう店の人に調節の仕方を聞いておくこと。肩ベルトは2か所締め具があるが私は始め上だけを締め付けていたためピッタリフィットしていなかったが途中で下に締め具があることに気付いてそれを締めると旨くフィットした経験がある。ベルト紐は毎日歩く毎にウエストが細くなりきつく締められるようになった。慣れるごとに早く旨くリュックがかつげるようになる。

Albergue について直ぐに使うもの即ち洗面道具、バスタオル、タオル、スリッパ、耳栓、アイブラインド、ヘッドランプ、下着、着替え等はリュックの上の方に入れてお

くと便利である。ポンチョは道中でわか雨が降り出した時すぐ取り出せるようにリュックの一番上に入れておくと直ぐ取り出せる。

— トレッキングシューズ Merrell Goretex

楽しく楽に歩くためには足にフィットした靴が必需品である。巡礼の旅には捻挫等を防ぐために中位の高さの靴が良いと思う。多くの巡礼者は足にマメ、靴ずれ等を作ってつらそうであったが、私は全く問題なかった。巡礼に出る前にトレーニングをして靴ずれ、マメができないことを確かめておく事。靴下は厚手かもしくは薄い靴下を2枚重ねてはいた。足指がある靴下が良いという人もいた。

砂利道もあるので砂利等が靴に入ったら直ぐ靴を脱いで取り出すこと。ほっておくと水ぶくれの原因になる。更に靴底の溝に泥、小石、砂などが挟まるので毎日掃除した方が滑らなくて良い。雨の後は新聞紙を丸めて靴の中に入れておくと乾きやすい。

— スティック

3段式の物がコンパクトで良い。ノルディックウオークの仕方を事前に練習しておく必要がある。下りには膝に対する衝撃を和らげ、また全身を使って歩ける。

— 寝袋

出来るだけ軽いものが良い。始めは使い方がわからなかったが、ベッドのマットの上に置いて利用する。寒さ対策とマットは汚い時あるので衛生上も必要。Albergueによってはマットと枕にけるティス^oー^oルのシーツをくれたがこれを取っておいて次回に使うのも良いかもしれない。

— パンツ (ズボン)

重さをセーブするためチャック式で半ズボンになるものが便利である。私は行程の半分は半ズボンとして利用した。

— 金銭・エアーチケット (電子チケット) はひとまとめにしてリュックの下の方に入れておくのが良い。服のポケットには直ぐ取り出せるように小銭で100ユーロ位は入れておきたい。(これで3日はすごせる) パスポートはAlbergueによっては受付で要求される時もあるので注意。

— 巡礼手帳 (credencial)、ハンカチ又薄手のタオル、ティッシュ、手帳、筆記用具、デジカメ、小銭はズボンか登山チョッキに入れておくと歩いている時すぐ取り出せる。

— 携帯電話は日本で使っている充電器を使えるがコンセントの形が違うので予め丸足2本のアダプターを用意する。

— カメラの乾電池はちょっと価格が高いが長い寿命のものを持って行くと便利。(充電する手間が省ける。長い寿命の乾電池も現地で調達は可能) 多くの写真を撮影したので32GBのSDを持って行った。

— 洗濯する量は多くないので、毎日手洗いするのが便利である。普通の固形石鹼を入浴、洗濯どちらにも使った。ちょっとむさ苦しいが髭をそるのは邪魔くさいので4月24日からSantiagoに着くまで髭を伸ばして5月23日にSantiagoで剃った。2トーンカラーの髭になったが自分では気にいっていた。

- 私は汗かきということもあるが、かなりの長距離を歩くので出来るだけ薄着の方が歩きやすい。雨が強い時は上下レインコートを利用する必要あるが、小雨の場合ポンチョが直ぐ着れて、しかも頭からリュックまですっぽりカバーできるので便利である。
- 薬 風邪薬、バツファリン、湿布、胃腸薬（正露丸）、筋肉鎮痛消炎剤、包帯などは持参した方が良いでしょう。但し各町には巡礼者を診察してくれる病院もあるので Albergue に紹介してもらおうと良い。足のマメを潰す針があるとよい。
- 食料 全て現地調達可能であるので日本から持って行く必要はない。休憩の時の食料は、オレンジ、チョコレート、クッキー、ピーナッツ、水などである。給水場は所々にあるので水は1リットもあれば十分である。スプーン、ナイフ、缶切り、栓抜き付アーミーナイフがあると便利である。

(4) エピローグ

スペイン巡礼の旅を終えて既に2ヶ月を過ぎようとしてやっと旅行記を書き終えたが、それを読み返す毎に楽しく、苦しく、充実した日々が鮮やかに蘇る。大きなトラブルも無く無事帰国できたことを、現地で仲良くしてくれたスペイン人の仲間達、更に安価で心地良い巡礼宿を提供してくれた各都市、町の皆さん、更にキリスト教関係者に心からお礼を言いたいと思う。更に巡礼道は良く整備されており、道標も至る所にあるためまず道に迷うこともなく快適に毎日歩く事を楽しめた。巡礼道では車道を出るだけ歩かないように側道をつくり安全の確保に気をくばっている。また道中歴史的建造物の見物もできるようなコースを辿らせてくれる。なにより嬉しいのは各町の人々がブエンカミノといって我々を励ましてくれることである。巡礼者は互いに励ましあって歩き続けてサンチアゴに到着することになる。

ある巡礼宿にキリスト教のポスターが掲げられていたが、そこには No hago yo el camino. El camino me hace a mi. (私は巡礼道を歩くのではない。巡礼道が私を歩かせてくれるのだ。) と書かれていた。

日本にも四国88ヶ所の歩き遍路に人気があるがまだ世界遺産として登録されていない。スペインの巡礼道から多くのことを学びいつの日にか四国巡礼道も世界遺産に登録されることを願っている。

皆さんも時間、体力、気力があれば是非すばらしいスペイン巡礼の旅にでられることをお勧めします。

完

(たなか みのる：元ニチメンアルヘンティーナ社長)